◉私の空間論〈会員〉

菊地精二

「空間」は，絵画の上で重大な要素である。考えさせられることは，絵画全体が「空間」ともいえるので，単にバックだけのことではない。自分の眼に入るもの全てが「空間」につながる。また，これは絵画のバルールに影響し，これと切り離すことはできない。

バルールがあるということは，絵の最後の決着点といえる。「空間」はそういうものであり，ここに造型の面白さがあるといえる。「空間」の欠けている絵は，造型的に失敗していると考えてもよい。「空間」は，一つのコミュニケーションとして大切である。

カット・安田郁子

安多郁子

白鳥座の中の星が，マグナスY線という光線をだしていて，これは星の一生からみてブラックホールという最後の発光現象だということがわかった……とテレビのニュース。

昔，私の絵をみた人の，

「一体ここには自然空間も心理的空間も，ハタマタ時間的空間もドラマチック空間も何もない，コレハ絵なのだろうか」と。この空間＝時間ということの難解さは，わが小宇宙を創る苦悩に等しいが，取りも直さずこれは絵画的思想の根本なのである。わが小宇宙の空間表現の苦しみは，永久につづき，そしてよい絵が描けない如く遂にわからないままかも知れず，一体，私におけるブラックホールはいつなのかナと，激しく形を変えながら流れる初夏の雲に，フト優雅なメランコリーを感ずる季節ではある。

新覚吉郎

変幻自在
離れない，しつこい奴だ
人も空も，物も，みんな
どうしても殺されそうになる
在ることは，ばらばらだ
キャンバスも絵の具も
ちぎって捨てたら……
無限はからっぽだった
生きてる証拠だ
魔術師め
芸術って，こわいことだなあ

藤井　正

「次元の異なるものが同一画面の中に存在していて違和感を伴なわず，一種の実在感となって迫ってくる」—わたくしの考えている空間である。

それはモチーフ，コンポジション，マチェール等の各面から追求しなければならないことである。単にバックを含めて，すべてのものがナチュラルなものとして人の目に映ることを指向するのでなく，心を通じて，「モノ」—俗物的なものでない—を感じさせることであり，いわゆる物語性を伴なわずして実在感を感じさせる，そういう空間をつくりたい。

そのことからいえば，わたくしのいう空間は物理的空間ではなく心理的空間を意味しているのであり，これはこと新しく述べるほどのこともない，絵画本然の生命でもある。

小川原　脩

われわれは把えがたい無限大と，これまた把えがたい無限小との，無限定な中間に存在する。渺々として名状しがたい何処かを漂い，確固とした何ものをも得ず此処に在る。自らは何も知るところなしに生まれ，自己の中に自己をみつめるもうひとつの自己と分ちがたく生存を続け，いつの日にか死との出合いに至る。

この生きて存在する場を《空間》と呼び，生の経過を《時間》と名づける。この状況の中で，時間を変転として体感し，空間を不安の根源として認める。空間こそいいようのないいら立ちの動機なのであり，空間はただ存在のための場としての意味を問いかける。

〈この無限の空間の永遠の沈黙は，私に恐怖をおこさせる〉とパスカルはいう。

折原久左エ門

——幼年期——見涯てぬ青空……その向うを想うこと頻り……。そして，遙か鳥海山頂に消えた赤い落陽が，明日（アシタ）の太陽とは……。

——少年期——鳥海山頂より入道雲がモクモクと頭上を覆い，蔵王山に達する頃，雨がくる。沛然たる飛沫を浴びながら，雨雲が切れて青い天空が見え出すのを待つ。

——同時期——わが足下の大地は，大空間に浮かぶ球体である，と教えられる。落ちたら〝ドウシヨウ〟と心労し，親を悲しませる。

——年を重ねて——木材，紙，そして金属を使って，わが主張を視覚化し，新しい造形的空間を創り出そうと考える。〈山が在り，湖が醸す情景，原生林と木洩れ陽が織りなす神秘……。それぞれが巨大な造形空間ならば，自然を破壊しながら進む〝生の営み〟もまた新しい風土を創ることだろうと……〉。

——今から——空を切り，ますます地面を割って創ったつもりのわが世界も，集約して穴ぐらを作り，一筋の光芒を突き立ててみたい。

カット・菊地精二

◉私の空間論〈会員〉

米坂ヒデノリ

ここをアイヌに返せ
アイヌはカムイにかえせ
みんな神の元に戻ったら仲よく使え
立つか坐るか，ということではないのだ
開拓者は征服者と同義語ではないのだ

押川　清

われわれの生まれた所，それは自然という大地。われわれが永い生涯をとじる所，それは大地だ。この切り離すことのできない土に，愛を感ずる。したがって，私は私なりに土に接していきたい。物を作るとき，それは素直で純粋であること，慾とか賞を取ったとかいうような気持があってはならない。より多くの人に土に愛を感じさせ，それによって楽しみや喜びを与えることだ。

われわれの祖先や，多くの先輩たちの遺した伝統をふみ台として，生活の中にとけ込むような作品。きびしさ，たくましい作品，そして土の中に自分を発見し，そだてたい。

伏木田光夫

ぼくは，タブロー作家としての立場を明確に打ち出したい。そのため，絵画空間は画面での戦いとなる。物差しで計って真黒くなる仕事も，ずい分続けた。分子核や宇宙力学を考え，画面は点の集積であるという空間意識を持つに至ったが，頭脳的に追求しだして，作家としての生命の輝やきを失なった。

すでに10数年をついやした。1年半のヨーロッパでの仕事を通して，画面はビッチリ点であるが，それは感情と純粋感覚の集積であり，絵画遺産としては印象派やフォーブを，再びおどろきの目を持って見た。

自然の宇宙空間と画面は，永遠に一緒になりはしない。タブロー作家は，そのためいつまでもバベルの塔を築くようなものだと思う。理論的には，立体空間の方が明確だが，ぼくは平面により，情熱を感じる。

国松　登

絵画は平面の上に思想や心象，事物，事象などを表わすために，永い間平面空間の上に立体的表現（物質感，立体感，遠近感など）を求めつづけてきた。

私は立体派以後，次第に平面化をたどりつつある今日の絵画が，更に明日の絵画が空間の設定（二次元の平面と理解するか，三次元的立体表現の場としての認識に立つか）をどのように解明して行くのかという疑問を持っている。

絵画空間は今や多面，多角（凹凸，変型）画面をはじめ，限定された額縁をはみ出し，無限の空間を求めて涯てしなく拡がって行くとき，平面か立体かなどという疑問は吹き飛んでしまうのかも知れないが，絵画とデザインの限界など，私の心のどこかで当分この疑問がつづきそうである。

野本　醇

宇宙飛行士が月と地球の間で，ふんわりと游泳したときの空間体験に大変興があります。私が絵画思考の中に求めようとしている空間は，〝彼がどんな対話を空間とし，認識したか〟私なりの立場でそれを解釈していますが，すでに現代絵画のなかでは，游泳感覚や宇宙的空間が具体的に抽象的に表現され，ことさら新しいものではありません。

宇宙的な静謐の世界で，日常的な流れのなかで，もの（実）とものの存在する証し（虚）の質を高めようとする溶媒のような役割りをするのが，絵画の空間なのではないかと考えております。

東　政雄

新しさを見出そうと想って，あれかこれかと考えているうちに，自分でないものがカンバスの上に表われる。それは，技が先になったり，色や形が変っただけの自分が失われたものである。しまいには，自分をいつわったものになってしまう。

芸術は厳しいと考えすぎたり，時代の流れにまどわされる。そんなことがとが何年か繰返えされて，やっとこじつけないで素直に無心でやれる仕事をと，今更のように反省させられる。真の仕事は，大自然の前にはじない無我の心境の中から生まれるのではないだろうか。創作だ，個性だと無理にこじつけないで。ともかく，理くつ抜きに素直に自分を出せたら，それでよいと思う。

◆私の制作

木村　良

樹氷と澄んだ空のコトンラストは，北海道ならではの味わいである。それも，桜を通して仰ぐ頃にはさらに蒼さを増す。やがて，葉桜とともに初夏がやってくる。梅雨もなく公害もない空は蒼でいっぱいになり，まさに心身ともに爽快な季節に入る。

このころの海の色がいい。寒流の緑に近いエメラルドの冷さも，暖流の襲来とともにコバルトからプルシャンに変っていく。私は今，日本海を真正面にした岩頭に立って，空や海をみつめて描いている。蒼に引かれて描いたのがこの絵である。一見平板に見えるこの絵は，爽快さを保つために避けたつもりだが——。

大自然の受けとめ方——，それは描く以前の問題として追求していきたい。

大本　靖

最近。鈴木春信やそれ以前の作家にみられる平面的空間処理に魅力を感じている。

いざ，下絵の段階で，無意識に透視画法的空間構成になってしまうのは，明治以後に入った，いわゆる洋画教育の残片がどこかにこびりついているのであろうか。